



守るこころは時を超え…

観音の里と呼ばれるゆえん

北近江の寺院や仏堂には多くの観音像が祀られています。その数は、国史市の指定文化財となつている像だけでも、五十近くに及んでおり、今もなお、地域の人たちによって守られています。数だけではありません、全国的に見てもその作例が少ない奈良時代後期から平安時代初頭という、非常に古い時期に造られた像が多数残っていることも特徴的です。

多く造られた理由

信仰の対象として重要なだけでなく、その美しい姿から美術的にも評価の高い観音像がどうして北近江に集中して残っているのでしょうか。それは己高山（木之本町古橋）の古代からの山岳信仰が大きく影響していると考えられています。己高山の中心寺院は観音寺と言ひ、その本尊は現在、古橋己高閣の中央に

ののでしょうか？それは、中世の村に生きる人たちにとって、神仏が精神的よりどころだったからでしょう。現在、村全体の信仰の対象となるのは神社が多いのですが、前近代においては神と仏は一体で、氏神ならぬ氏仏という考えがありました。観音像は氏仏として、江戸時代を経て今の住民に引き継がれたものなのです。

地域の宝

作家の井上靖は、湖北の仏についてこう書いています。「長年に亘つて、その集落の守り本尊である仏さまたちを、村々、村人たちが守って来ているということである。寺が住職の居ない無住の寺になると、新しくお堂を造つて、そこに納めたり、公民館内にお迎えしたりして、いろいろな形で、集落の人たちが護り、そうしたことは今も続いているのである。」（駒澤探道『佛姿写伝・近江』序）
北近江の観音像は、仏像そのものに魅力があるだけでなく、村人により守られてきたことに最大の特徴があります。この観音像を守り伝えてきた人たちの心もまた、地域の宝なのです。

安置されている鶏足寺十一面観音立像です。*『己高山縁起』などによれば、平野部には己高山傘下の寺院が数多くあつたことが知られ、それぞれの寺院の本尊として、観音像が造られたと読み取ることができます。

古代寺院から村人へ

観音像が祀られた古代寺院は、中世（鎌倉・室町時代）には廃絶したと考えられています。その後、残された観音像は、村人たちによって守られます。

戦国時代、「近江を制する者は天下を制す」と言われるほどの要所であつたこの地域は、幾度も戦乱の舞台となり、多くの寺社が焼かれました。そのたびに、焼失の危機にさらされた観音像は、村人の手によって堂から運び出され、池に沈められたり、土に埋められたりしながら守られてきたのです。

なぜ、村人たちは自らの危険を顧みず、そんなことができたのか。観音さまは「観世音」とも呼ばれ、世（人間界）の音（災害）を観（見）て、人々の苦しみを除去する仏であると言われています。今、観音像との出会いを求め多くの人が長浜に訪れています。時を超え姿や形が変わつても、守る心は変わることなく、今もなお脈々と受け継がれる北近江の観音像。長浜が誇るすばらしい宝物です。皆さんも、その心を感じてみてください。

滋賀県立近代美術館 学芸課長 高梨純次氏



北近江には奈良時代後半から平安時代初頭という、全国的にも現存例が少ない時期の仏像が集中しており、さらに各像が個性に満ちた作風を示しながら、極めて完成度の高い本格的な姿をみせている。観音像は北近江という地域を特徴づける、他の地域の追随を許さない、まことに貴重な文化財である。